

## ④ メッチャ緊張するわ

奈良文化女子短期大学付属高校には 46 台のワープロを設置した教室がありました。それは富士通のオアシスでした。昭和 58 年に県教育委員会学校教育課に導入

されたワープロが富士通のものであったのを手始めに、購入したワープロ 6 台のうちの 5 台までが富士通製という私です。隅から隅まで知り尽くした機械です。放課後、この教室をのぞいて



みると、熱心に練習している生徒がいました。検定試験間近だったのです。この試験では大部分が 4 級を受験、3 級を受ける生徒はわずか、準 2 級はなく、U さん 1 人が 2 級を受けるということでした。

「よし、いっしょに受けてやろう」と 2500 円の受験料を添えて担当の K 先生に申し込みました。そして、文部省後援、日本ワープロ検定協会主催の第 34 回日本語ワープロ検定試験受験票を受け取りました。

いよいよ試験日がやって来ました。級ごとに座席が指定され、私は U さんの隣に座りました。いくつになっても緊張するのが試験です。

50 近くも歳の離れた隣の席の I さんは、

「先生といっしょに受けるなんて、メッチャ緊張するわ」

と言いました。私は、

「生徒といっしょに受けるなんて、メッチャメッチャ緊張するよ」

と言いました。1 年生からワープロを始め、熱心に練習してきた彼女の打鍵スピードは大したもの、私が緊張するのは当然でした。

まずは速度検定です。漢字が25%~30%ほど混じった文章を10分間打ちます。500文字以上打てれば合格なのですが、1ミスごとに3文字引かれます。仮に「メッチャ」という語があって、これを「めっちゃ」と打てば、3×4で12文字分引かれてしまうのです。当然この語になっている筈だと同音異義語を打ってしまうことの多いワープロ操作です。合格するためには50文字くらいの余裕は必要でした。

「用意。始め」の合図で試験が始まりました。教室全体がカタカタカタという音でいっぱい、隣からは一段とスピードのある音が聞こえてきます。指がもつれそうになる10分間でした。「止め」という合図でキーボードから手を離れた彼女は、私の画面をのぞきこみ「勝ったなあ」と言いました。ほんの少しだけ負けていました。

次は、文書作成の試験です。文書番号や発送年月日の書き方、受取人の役職と氏名、差出人の所属、役職、氏名などの書き方に一定のルールがあります。文書の表題の書き方や「記」以後の箇条書きにもルールがあります。このほうは20分間の試験です。課題が配布され試験が始まりました。私は時間が来ないうちに打ち終え、もう1度見直しました。彼女は、まだ打ち続けています。「止め」の言葉で終わったとき、私は、彼女に「勝ったなあ」と言いました。

2週間後、合格証書が送られてきました。私たち2人が受け取った2級の合格証書、それは、この学校で最初のものでした。

翌年、K先生が退職され、それまで、物理と化学を担当していた私が情報処理の学習を担当することになりました。

これから必須の道具となるパソコンです。ワープロとして使うにも、表計算に使うにも、Eメールを送り、ホームページを閲覧するにも、キーボードからの入力が必要です。ですから、まずはキーボードに対するアレルギーをなくすことが大切です。私は、「ワープロを筆記用

具として使いこなせるようになる」ことを目標に授業を展開しました。

速度検定の合格基準は、4級が200、3級は300、準2級が400、2級が500、準1級が600、1級ではなんと700字になり、1ミスで5字分が差し引かれるのです。

「ちょっと級と級の間之差が大き過ぎる。これでは意欲を失うのではないか」と考えた私は、その後いっしょにこの学習を担当することになったY先生と相談し、50文字きざみの本校だけに通用する技能検定の制度を作りました。下から、K、J、H、G、F、E、D、C、B、Aとし、これをグレードと名付けました。この合格証書を本校のスクールカラーであるピンク色で作成し、生徒に渡すことにしました。努力することによって何かが与えられる体験が、熱心な練習を誘発し、検定を積極的に受けるようになってきました。

そして、「先生、今日の放課後に練習させてもらえますか」とやってくる生徒が増え、その後はほんとうのワープロ検定の合格率も飛躍的に伸びました。その1人にHさんがいます。彼女は卒業後、併設短大の教養学科情報処理コースを修了し、富山大学工学部に編入学しました。「私はワンルームマンションのほうがいい」という学生が多く、どちらかと言えば敬遠されがちな学生寮に入り、学費のほとんどをアルバイトでまかなったというがんばり屋さんの彼女は、先生方にも愛され無事に卒業、春には卒業証書を見せに来てくれました。工学士の称号を得た彼女です。この分野では私を追い越したようです。それは、教師としての大きな喜びでした。